

史料研究

ティラスミー・アエヤーリー小説の 出版史

——19世紀末から20世紀初頭のヒンディー文学に
おける新潮流の台頭と衰退——

安 永 有 希

1. はじめに

ティラスミー・アエヤーリー小説 (Tilasmī Aiyārī Upanyāsa)⁽¹⁾とは、19世紀末から20世紀初頭にかけて精力的に執筆活動を行なったヒンディー小説家、デーヴキーナンダン・カトリー (Devakīnandana Khatrī, 1861.7.18–1913.8.1) が創り上げたヒンディー小説特有の一潮流であり、物語の核となる二つのモチーフ、「迷宮」(tilasma)と「幻術使い」(aiyāra)から名付けられている。この二つのモチーフはペルシャ文学の『ティリスメ・ホーシュルバー』(Tilism-e Hošrbā)に代表されるダースターン(dāstāna)に描かれてきたものである。『ティリスメ・ホーシュルバー』に描かれた迷宮は魔術師によって作られ、何万人もの魔術師が住む地域を指す。そこに入り込んだ者は、魔術師を倒して迷宮を征服しない限り、その世界から逃れることはできない。また、そこに描かれた幻術使いは、変装と失神薬を駆使して魔術師に立ち向かう。19世紀後半には、このようなダースターンがヒンディー語に翻訳されてインドで広く読まれていた [安永: 270–271]。そして、この二つのモチーフをヒンディー文学に取り入れたカトリーは、ダースターンで当然のごとく見られる魔法や妖精といった超自然的描写を否定し、電気や電流といった科学的な要素を取り入れることによって、従来にない新鮮な物語を創り上げることに成功した [安永: 272]。基本的にこの種の小説には、王子が幻術使いと力をあわせて敵と戦いながら、迷宮に閉じこ

められた王女を救出し結婚するまでの物語が描かれている。略して「ティラスミー小説」と呼ばれることもあるが、二つのモチーフはどちらも必要不可欠な要素であるため、本稿では「ティラスミー・アエヤーリー小説」という名称を採用する。

ヒンディー文学界の著名な批評家ハザーリープラサード・ドゥヴィヴェーデー（Hazārīprasāda Dvivedī, 1907-1979）は、この時期のヒンディー文学の特徴を次のように述べている。

ヒンディー語では、小説や短編小説は、それまでになかった、まったく新しいものであるが、この分野でのヒンディー文学は、まことに目覚ましいものがあり、デーヴキーナンダン・カトリー（Devakīnādana Khatrī 1861-1913年）が1888年に発表した『チャンドラカーンター姫⁽²⁾』（*Candrakāntā*）に始まり、プレームチャンド（Premcand 1880-1936年）が1936年に出版した『ゴダーン』（*Godāna*, 邦訳は『牛供養』）に至るまで急速な展開を見せたのだった〔ドゥヴィヴェーデー: 246〕。

19世紀後半、ヒンディー小説はベンガル文学や英文学などの翻訳を介して成長していた⁽³⁾。『チャンドラカーンター王女』（1892）以前にもいくつかの小説が執筆されてはいたものの、それらの小説が民衆に広く読まれることはなく、『チャンドラカーンター王女』の登場は、ヒンディー小説の歴史において重要な転機であった。というのも、幻術使いらの騙し合いや迷宮での冒険といった、カトリー以前には見られなかった娯楽に徹した物語が民衆を虜にし、それまでは聞き手として存在していた非識字者らが、カトリー作品を読むために、あるいは読みながら文字を学び、ヒンディー文学の読者に変貌していったのである〔Madhureśa: 58; Śarmā 1993: 13; Śukla: 499; Yugeśvara: 3〕。ヒンディー文学で初めてのベストセラーになったと称されるほど版を重ねた『チャンドラカーンター王女』は、ヒンディー文学に新たな潮流を創り出しただけでなく、後世のヒンディー小説の発展にも大きく貢献していた。

『チャンドラカーンター王女』の登場以降、ヒンディー小説が勢いを

つけて発展しようとしていた状況のなか、1914年に『休護所』(Sevā Sadana)で一躍有名となったプレームチャンドの登場が第二の転機となる。プレームチャンドはインドの民衆の生活を緻密に描き出し、ヒンディー小説に写実主義を導入した⁽⁴⁾。この写実主義の高まりに反し、ティラスミー・アエヤーリー小説の勢いは衰えていく。そしてこの50年ほどのあいだに、小説に描かれる主人公が王侯貴族から民衆に変わり、小説作法は冒険読物から写実主義小説へと大きく変化したのであった〔ドゥヴィヴェーデー:276〕。

従来の研究において、ティラスミー・アエヤーリー小説の出版状況を、典拠を提示して論じるものは見られない。たとえば、ゴパール・ラーエ(Gopāla Rāya)による『ヒンディー小説の歴史』(*Hindī Upanyāsa kā Itihāsa*)には、カトリー作品をはじめとするティラスミー・アエヤーリー小説についての記述が見られるが、その情報一つひとつに具体的な出典が示されていないため、その真偽については判断がつかない〔Rāya 2010: 68-78〕。そこで本稿では、より信憑性の高い情報を提示するため、実存する資料をもとにティラスミー・アエヤーリー小説の出版状況を明確にしていく。そうすることで、19世紀末から20世紀初頭にみられるヒンディー小説の発展の一端、すなわち、ヒンディー小説が写実主義へと向かう前段階に、ヒンディー小説の萌芽として生まれたティラスミー・アエヤーリー小説の流れを、正確に把握することが可能となるであろう。

また、ティラスミー・アエヤーリー小説が徐々に作品数を増やすなか、それらの作品に対して「迷宮と幻術使いが描かれた奇想天外な小説」という共通認識はあったものの、統一された名称はなかった。そのため、ティラスミー・アエヤーリー小説に言及するときは、いくらか説明的に表現せざるを得なかったのである。これらの作品群に「ティラスミー・アエヤーリー小説」という総称が与えられたのは、賛否両論が飛び交った当時の雑誌記事や後世の批評を通してのことであった。本稿では、この総称としての「ティラスミー・アエヤーリー小説」の

成立過程もあわせて検討する。

2. ティラスミー・アエヤーリー小説の出版状況

大前提として、ティラスミー・アエヤーリー小説の出版状況を漏れなく把握することは不可能である。そのなかでも、イギリス植民地下の言論統制の過程で作成された(旧)インド省図書館(India Office Library, 以下IOL)の目録と、(旧)英国博物館(British Museum, 以下BM)の図書部による目録、さらに大英図書館(The British Library, 以下BL)所蔵の目録を参照し現物にあたることで、断片的ではあるけれども、当時の出版傾向を窺い知ることが可能となる[Blumhardt: 1893; 1902; 1913; Blumhardt & Wilkinson: 1957; *CHB*; 安永: 261-262]。また、IOLによって19世紀の南アジア諸言語の出版情報がマイクロフィルムに記録された、South Asia Microform Project(以下SAMP)の目録は、出版社や出版年月日などの情報も記された貴重な資料であるが、これも完全なものではない⁽⁵⁾。出版物の内容も簡潔に記されるにとどまり、「ラブストーリー」や「ロマンス」といった説明書きを見るだけでは、ティラスミー・アエヤーリー小説か否かを判断することはできない。そのため、SAMPの目録は、IOLやBM、BLの目録(あるいは、目録に記載された出版物で閲覧可能なものや、そこに掲載された広告)から得られる情報を補完するものとして参照すべきであろう。

表1は上述の諸資料によって判明したティラスミー・アエヤーリー小説作品を、確認できるかぎり出版年順に並べたものである。可能なかぎり初版出版年を採用しているが、初版出版年が不明なものについては、最も古い情報をもとに記載した。また、広告に掲載されているタイトルについては広告の出版年で記載しているが、実際の作品の出版年がいつ頃であったのか、数ヶ月前なのか数年前なのかを判断しようがないことは予め断っておく。しかしながら、それらの作品が『チャンドラカーンター王女』の初版出版年である1892年以前であったとは考えにくい。

表1 ティラスミー・アエヤーリー小説の出版状況

	出版年	書名	備考
1	1892	チャンドラカーンター王女	初版本および目録から
2	1895	続編チャンドラカーンター王女	1905年まで連載
(a)	1900	紅花の夢	または1901年、広告より
3	1901	月のような美女モーヒニーと幻影の館	1908年出版の2版序文から
4	1902	真珠の館とラクシュミーデーヴィー王女	広告より
(b)	〃	スールヤカーンター王女	〃
5	〃	マヘンドラ王子	〃
(c)	〃	チャンドラバール王女	〃
(d)	〃	ふたりの覆面の男	〃
6	1904	生首の戯言と鏡の迷宮	SAMPより
7	〃	カマル王女とサファイヤの迷宮	広告より
(e)	〃	マーヤーヴィラーサ	第3章, SAMPより
(f)	1905	小説ランバー	SAMPより
(g)	〃	パドマ王女	〃
(h)	1906	チャンドラムキー王女	広告より
(i)	〃	ビーレンドル王子と銀の迷宮	第4章, SAMPより
(j)	〃	狡猾な幻術使い	SAMPより
(k)	〃	ループスンドラー王女とジャーランダルの迷宮	〃
(l)	〃	チャンドラヴァティ王女	〃
8	1908	幽鬼ブートナート (デーヴキーナンダン執筆分)	1913年まで連載, 広告より
9	〃	操り人形の館とグラープ王女	SAMPより
(m)	1912	迷宮の塔	広告より
(n)	〃	アーナンドスンドラー王女	〃
10	1915	幽鬼ブートナート (ドゥルガーブラサード執筆分)	1935年まで連載, SMAPより
(o)	〃	魔法の館	または1916年, 広告より
(p)	〃	愛の果実	広告より
(q)	〃	スヴァルンカーンター王女	〃
(r)	〃	ソーマの蔓	〃
(s)	〃	黄金の蔓	〃
11	〃	クリシュナカーンター王女	第1章2版・第2章, SAMPより
12	1921	続編クリシュナカーンター王女	第3章 (版数不明), SAMPより
13	1922	ブレイムカーンター王女	第3～5, 8章
(t)	〃	月光	広告より
14	1925	続編ブレイムカーンター王女	第1～3章, 広告より
15	1931	地下迷宮とマグヴァンスリー王女	第2, 3章
(u)	〃	軍団	広告より
16	1935	ローフタースの僧院	1935年以降 (9版は1966年出版)
(v)	1939	迷宮の館	広告より

このように、表1に掲載した作品は、実際にその一部でも現物を閲覧することができたものと、目録や他作品の広告からのみ情報が得られたものの二種類に分類できる。表1では前者に番号を、後者にアルファベットを付した。以下では出版年順に各作品を紹介していくが、広告から判明した作品については、解説の都合上、その順序が多少前後している。また、便宜上、これらの作品をそれぞれの特徴にもとづいて三つに分類した。すなわち、ティラスミー・アエヤーリー小説の登場に貢献したカトリー作品を「ティラスミー・アエヤーリー小説の登場」、カトリーに追隨して執筆された作品群を「多様なティラスミー・アエヤーリー小説の展開」、そして、写実主義が登場したあとに執筆された作品群を「後期ティラスミー・アエヤーリー小説」としている。

①ティラスミー・アエヤーリー小説の登場

1. 『チャンドラカーンター王女』(1892)
2. 『続編チャンドラカーンター王女』

(*Candrakāntā Santati*, 1895–1905)

ティラスミー・アエヤーリー小説はデーヴキーナンダン・カトリーによる『チャンドラカーンター王女』(全4章)から始まった。各章の初版出版年は1892年であり、さらに全4章を一冊にまとめた合本版の初版も1892年に出版されている[安永:262]。また、『続編チャンドラカーンター王女』(全24章)は、カトリーが設立したレハリー出版社(Lahari Press)発行の月刊誌『小説波』(*Upanyāsa Laharī*)において、連載というかたちで発表された。本稿で「続編」と訳出した単語“santati”が、「子孫・子」という意味も持つことから分かるように、『続編チャンドラカーンター王女』には、『チャンドラカーンター王女』の主人公であるチャンドラカーンター王女とビーレンドル王子の子供たちの物語が、24章にわたって描かれている。カトリーはおよそ10年をかけて、この長編大作を完成させた。『小説波』は1895年前後に創刊され、さらに第24章初版は1905年に出版されていることから、『続編チャンドラ

カーンター王女』は1895年から1905年にかけて出版されたと考えられる [Khatrī 1905; 安永: 262–263]。カトリーによるこの『チャンドラカーンター王女』シリーズは非常に人気となり、圧倒的な再版数を誇っていた [安永: 277–279]。

②多様なティラスミー・アェヤーリー小説の展開

3. 『月のような美女モーヒニーと幻影の館』

(*Mayaṅka Mohinī yā Māyāmahala*, 1901)

ハリクリシュナ・ジョーハル (Harikrshṇa Jauhara) による『月のような美女モーヒニーと幻影の館』(1908: 2版)は、全133頁にわたって描かれた物語である。その序文は1901年1月4日に書かれているため、初版は1901年に出版されたと考えられる [Jauhara 1908]。迷宮と幻術使いが描かれたこの小説はカトリー作品に忠実に倣っているかのようには思われるが、実際にはカトリー作品と異なる大きな特徴を持つ。カトリー作品に描かれた不可思議な出来事は、物語が進むなかで例外なく種明かしがなされるが、ジョーハルの描く物語には、非現実的な描写がそのまま謎として残されるのである。たとえば、悪役のグラーブ妃が手拍子をして像に話しかけると像がそれに答えるという描写が随所に見られるが、その絡繰りが明かされることはない [Jauhara 1908: 52–53]。

4. 『真珠の館とラクシュミーデーヴィー王女』

(*Motīmahala yā Lakshmīdevī*, 1902)

ヴィクラマ暦^⑥1972年(西暦1915年か1916年)、ニハールチャンド・ヴァルマー (Nihāracanda Varṃmā) による『真珠の館とラクシュミーデーヴィー王女』(第1章2版)が出版された。この小説は全6章からなる。第1章初版の記録は見られないものの、『チャンドラカーンター王女』(1902: 第4章)の巻末に掲載されたレヘリー出版社既刊書一覧には「3章が出版されている」と記載されているため、第1章初版は1902年以前には出版されていたと見なすことができる [Khatrī 1902]。この物語

にも王子と王女、王女との結婚を画策する敵国の王が登場し、敵味方の幻術使いの奮闘や不思議な迷宮の描写に満ち満ちている [Varmmā 1915 or 1916]。

『真珠の館とラクシュミーデーヴィー王女』(1917: 第3章2版)の巻末広告には、「幻術使いと迷宮の小説」として『チャンドラカーンター王女』と並んで、(b)『スールヤカーンター王女』(*Sūryakāntā*)というタイトルが記されている。このタイトルは『チャンドラカーンター王女』(1902: 第4章)の既刊書一覧にも記載されているため、1902年にはすでに出版されていたことが分かる [Khatrī 1902; Varmmā 1917]。

5. 『マヘンドラ王子』(*Mahendrakumāra*, 1902)

シャンカルダヤール・シュリーヴァースタヴ (*Śaṅkaradayāla Śrīvāstava*) による『マヘンドラ王子』(第1・2章2版)は1908年に出版された。第1章の巻末広告に「マヘンドラ王子 6章」と記されていることから、『マヘンドラ王子』は全6章で構成されていることが分かる [Śrīvāstava]。また、このタイトルは『幻影の館』(1908: 2版)掲載の既刊書一覧にも見られ、「幻術使い、迷宮、戦、ベテンなどの風変わりな描写」が描かれた小説だと紹介されている [Jauhara 1908]。『マヘンドラ王子』も『チャンドラカーンター王女』(1902: 第4章)に掲載の既刊書一覧に掲載されていることから、1902年にはすでに出版されていたと考えられる [Khatrī 1902]。

『チャンドラカーンター王女』(1902: 第4章)に掲載の既刊書一覧には、他にも (c)『チャンドラバーガー王女』(*Candrabhāgā*) や (d)『ふたりの覆面の男』(*Do Nakāba Pośa*, 全5章)というタイトルが記されている。『チャンドラバーガー王女』は『続編チャンドラカーンター王女』(1906: 第2章4版)の巻末広告にも「迷宮と幻術使いについての小説」として掲載されており、また、3版は1931年11月に出版されていることがSAMPより判明する [Khatrī 1906; SAMP: I-1932, 8]。小説『神の遊び』(*Vidhātā kī Līlā*, 1926)の巻末広告にまとめられたレヘリー出版社既刊書一覧には、『チャンドラバーガー王女』について以下の紹介文が

掲載されている [Khatrī 1926]。

幻術使いと迷宮についての小説は興味をひきますが、そこに魔法も描かれていたら、黄金が芳香を放っているようなものでしょう。この本には摩訶不思議な迷宮の様子と奇妙な幻術が描かれており、そのあいまに、一度読みはじめたら最後まで止められないような魔法が描かれているのです。[Khatrī 1926] (筆者訳)

6. 『生首の戯言と鏡の迷宮』

(*Kaṭe Mūḍa kī Do Do Bāṭem yā Tilasmī Sīsamahala*, 1904)

デーヴキーナンダン・カトリーと同時代に精力的に執筆活動を行っていた作家、キショーリーラール・ゴースワミー (Kīśorīlāla Gosvāmī, 1865–1932) も、ティラスミー・アエヤーリー小説を執筆していた。1904年1月15日に初版が出版された『生首の戯言と鏡の迷宮』(1914: 2版)は、全61頁という非常に短い物語である [SAMP: Mar. 1915, 21]。この小説に描かれた迷宮や幻術使いは極めて簡略化されたものであり、さらに特筆すべきは、王侯貴族が登場しないことであろう。物語は次の文から始まる。

この物語は1835年のチャイトラ月から始まる。東インド会社がインドに一步一步進出しているさなかで、英国の女王ヴィクトリアが、まだこの国を手に入れていない頃のことであった [Gosvāmī: 1]。(筆者訳)

現実世界を舞台とするため突飛な描写をあえて避けているのかもしれないが、この小説では奇想天外であるはずのティラスミー・アエヤーリー小説の魅力が半減しているように感じられる。ここで描かれる迷宮は、「鏡の迷宮」と呼ばれるひとつの部屋であり、山間に現れた喋る生首である。幻術使いは登場せず、それに近い働きをするハシーナーという名の女性が描かれている。

7. 『カマル王女とサファイヤの迷宮』

(*Kamalakumārī vā Tilasma Nīlama*, 1904)

『カマル王女とサファイヤの迷宮』(1916: 3版)はジョーハルによっ

で執筆された小説である。『チャンドラカーンター王女』（1904：第1章6版）の巻末広告にこのタイトルが記されているため、初版は1904年以前に出版されたと推察できる [Jauhara 1916; Khatrī 1904]。また、2版は1908年6月20日に出版されている [SAMP: Sep. 1908, 11]。その序文でジョーハルは、『カマル王女とサファイヤの迷宮』が (a) 『紅花の蔓』 (*Kusumalatā*) と『月のような美女モーヒニーと幻影の館』につづく自身の三作目の小説であると述べている [Jauhara 1916]。『月のような美女モーヒニーと幻影の館』の初版出版年は1901年であるから、『紅花の蔓』はそれ以前に出版された作品であろう。さらに、月刊誌『小説波』第5巻8、9号（西暦1900年か1901年）に掲載の既刊書一覧には『紅花の蔓』というタイトルが記されているが、第5巻4、5号（1900）には見られない。つまり、ジョーハルは1900年か1901年に『紅花の蔓』を、その直後の1901年に『月のような美女モーヒニーと幻影の館』を、そして1904年までに『カマル王女とサファイヤの迷宮』を出版したということになる。また、序文から『紅花の蔓』の物語内容は読み取れないが、既刊書一覧に掲載された紹介文に、「この小説には、最上級の幻術と、非常に摩訶不思議な迷宮が描かれている」との記述がある [Khatrī 1926]。つまり、ジョーハルの処女作と考えられる『紅花の蔓』もテイラスミー・アエヤーリー小説であった。

1912年に出版された歴史小説に掲載の広告には、「アエヤーリー」 (*Aiyārī*) という区分で、『カマル王女とサファイヤの迷宮』と併記するかたちで、(e) 『マーヤーヴィラーサ』 (*Māyāvīlāsa*, 全6章) と (f) 『小説ランバー』 (*Rambhā Upanyāsa*) というタイトルが記されている [Gupta]。この『マーヤーヴィラーサ』と『小説ランバー』の出版記録は、SAMPでも確認することができる。SAMPより、『マーヤーヴィラーサ』第3章初版は1904年3月16日、第4章初版は1904年8月12日に、そして『小説ランバー』初版は1905年5月4日に出版されたことが判明する [SAMP: 1904, 20; 1905, 19]。

『月のような美女モーヒニーと幻影の館』（1908：2版）の巻末広告に

は、『チャンドラカーンター王女』や『生首の戯言と鏡の迷宮』といったタイトルとともに、「幻術使いと迷宮についての小説」として (g) 『パドマ王女』 (*Padmakumārī*) が記載されている [Jauhara 1908]。SAMPからは『パドマ王女』第1～3章の初版が1905年6月10日に出版されたことが判明する [SAMP: 1905, 18]。また、『続編チャンドラカーンター王女』(1906: 第2章4版)の巻末広告には、「迷宮と幻術使いについての小説」として (h) 『チャンドラムキー王女』 (*Candramukhī*) というタイトルが『チャンドラパーガー王女』と並んで掲載されている [Khatrī 1906]。

(i) 『ビーレンドル王子と銀の迷宮』 (*Bīrendrakumāra vā Cāndī kā Tilasma*, 全4章)も、『マーヤーヴィラーサ』や『小説ランパー』と同様に、1912年に出版された歴史小説に掲載の広告に「アエヤーリー」という区分で記載されている [Gupta]。またSAMPから、『ビーレンドル王子と銀の迷宮』の第4章初版が1906年12月25日に出版されていることが分かる [SAMP: 1907, 10]。

IOLやBMの目録には見られず、SAMPにのみ記載されている作品として、ラクシュミー・ナーラーヤン・グプタ (*Lakshmi Narayan Gupta*) による (j) 『狡猾な幻術使い』 (*Dhūrta Aiyāra*, 初版) が挙げられる。この作品は1906年5月19日にアリーガルにおいて出版された [SAMP: 1906, 21]。タイトルから察するにティラスミー・アエヤーリー小説だと思われるが、物語内容については不明である。また、シェオ・シャラン・ダース (*Sheo Saran Das*) による (k) 『ループスندگان王女とジャーランドルの迷宮』 (*Rūpasundarī yā Tilisma Jālandhara*, 第1章初版) は、1906年12月20日にバナーラスで出版された80頁ほどの小説である [SAMP: 1907, 11]。この作品も同様にティラスミー・アエヤーリー小説だと思われるが、出版年月日および出版地以上の情報は得られない。さらに1910年8月25日、ブラジ・モーハン・ラール・ジャー (*Braj Mohan Lal Jha*) による (l) 『チャンドラヴァティー王女』 (*Candravatī*, 1章初版) が出版された。SAMPの記録によると、この小説はカトリーによる『チャ

ンドラカーンター王女』に倣って執筆されているため、テイラスミー・アエヤーリー小説だと見なすことができる [SAMP: Dec. 1910, 17]。

8. 『幽鬼ブートナート』 (*Bhūtanātha*, 第1～6章, 1908–1913)

『チャンドラカーンター王女』シリーズを締めくくる『幽鬼ブートナート』の第1～6章は1908年から1913年にかけて出版された [Khatri 1912; 1913; SAMP: Mar. 1909, 25; Mar. 1912, 24; Sep. 1912, 19; Sep. 1913, 18]。『続編チャンドラカーンター王女』に登場する幻術使いブートナートの数奇な人生を描いたこの小説は、カトリーの死によって未完成となったが、のちにカトリーの息子であるドゥルガープラサード・カトリー (Durgāprasāda Khatri, 1895–1974) が完成させている [安永: 266]。

9. 『操り人形の館とグラープ王女』

(*Putalīmahala va Gulābakumvarī*, 1908)

ラームラール・ヴァルマー (Rāmalāla Varmmā) による『操り人形の館とグラープ王女』(第1章2版)は、ヴィクラマ暦1968年(西暦1911年から1912年)に出版された。その初版出版年は1908年4月15日である [SAMP: Sep. 1909, 23]。表題紙に「幻術使いと迷宮の新たな小説」と記載されていることから分かるように、王子や王女、幻術使い、覆面の騎士が登場し、迷宮や眠り薬、気付け薬が描かれた小説である。第1章の最後に「この続きを知るために、第2章をお読みください」との記載があるが、現時点で第2章を入手することはできない。さらに、この物語がいくつの章で構成されているのかも不明である [Varmmā 1911 or 1912: 114]。

1912年、ある小説の巻末広告で (m) 『迷宮の塔』 (*Tilasmīburja*) という小説が宣伝された。そこに詳細な出版情報は記載されていないものの、「迷宮と歴史の描写がとても魅力的で生彩ある小説」と謳われている [Śarmmā]。さらに、同年に出版された歴史小説に掲載の広告には、「アエヤーリー」という区分で『カマル王女とサファイヤの迷宮』や『マーヤーヴィラーサ』と並んで (n) 『アーナンドスンダリー王女』 (*Anandasundarī*) というタイトルも記載されている [Gupta]。

③後期ティラスミー・アエヤーリー小説

10. 『幽鬼ブートナート』(第7章~21章, 1915-1935)

カトリーの没後、息子のドゥルガープラサードは未完の小説『幽鬼ブートナート』の第7章から第21章までを執筆して完成させた。ドゥルガープラサードが執筆した最初の章(第7章)の初版は1915年6月11日に出版されている[SAMP: Dec. 1915, 27]。以降、ほぼ年に一章のペースで執筆していたようである[Khatrī 1931; 1932; 1933; 1934; 1935; SAMP: Sep. 1918, 15; Mar. 1922, 44]。

『真珠の館とラクシュミーデーヴィー王女』(西暦1915年から1916年: 第1章2版)の表紙裏には(o)『魔法の館』(*Jādūkā Mahala*)の広告が掲載されている。そこに記載された紹介文より、この作品がティラスミー・アエヤーリー小説であることは明らかである。

幻術使いと迷宮、そして魔法が描かれた、これほどまでに摩訶不思議な小説を、今まで読んだことはないでしょう。この小説には奇妙な魔法や、珍しくとても賢い幻術使いらの幻術、驚きに満ちた迷宮、幻術使いと魔法使いたちの恐ろしい戦いなどの場面が、とても美事に描かれています。声を大にして言いましょう。このような摩訶不思議な小説を、あなたは読んだことはないはずです。
[Varmmā 1915 or 1916] (筆者訳)

また、その巻末広告には「幻術使いの新たな小説」と題して、(p)『愛の果実』(*Prema kā Phala*)、(q)『スヴァルンカーンター王女』(*Svarnakāntā*)、(r)『ソーマの蔓』(*Somalatā*)、(s)『黄金の蔓』(*Hemalatā*)というタイトルが紹介されている[Varmmā 1915 or 1916]。

11. 『クリシュナカーンター王女』(*Krshṇakāntā*, 1915)12. 『続編クリシュナカーンター王女』(*Krshṇakāntā Santati*, 1921)

ティラスミー・アエヤーリー小説のタイトルは『チャンドラカーンター王女』や『プレームカーンター王女』のようにヒロインの名前を用いるものが多い。そしてSAMPを見ると、「ヒンディー語—フィク

シオン」に分類される作品のなかには、『チャンドラキラン王女』(*Kumārī Candrakiraṇa*, 1906: 初版) や『ラクシュミーカーンター王女』(*Lakshmīkāntā*, 1907: 第1章初版) 『パドミニーカーンター王女』(*Padminīkāntā*, 1907: 初版), 『スーラジウムキー王女』(*Sūrajyūmkī*, 1913: 初版) といった、一見、ティラスミー・アエヤーリー小説らしきタイトルも見受けられる [SAMP: 1907, 9; Mar. 1908, 22; Sep. 1913, 16]。しかし、それらの作品内容は記されていないため、ティラスミー・アエヤーリー小説だと断言することはできない。ただし、ガンガー・プரசード・グプタ (*Ganga Prasad Gupta*) による『続編クリシュナカーンター王女』(*Kṛṣṇakāntā Santati*) は、ヒロインの名前からタイトルが付けられているうえ、「続編」(*santati*) という単語も用いられていることから、カトリーによる『続編チャンドラカーンター王女』に倣った作品であると考えてよいだろう。『続編クリシュナカーンター王女』の第3章(版数不明)は1921年5月16日に、第9～12章初版は1924年に、第26～28章初版は1928年に出版されている [SAMP: Mar. 1922, 45; IV-1928, 12]。また、この前作と考えられる『クリシュナカーンター王女』の第1章初版は1915年7月2日に、第2章初版は1915年8月17日に、第6章初版は1916年2月18日に出版されたことが確認できる [SAMP: Dec. 1915, 27; Jun. 1916, 21]。

13. 『プレームカーンター王女』(*Premakāntā*, 1922)

14. 『続編プレームカーンター王女』(*Premakāntā Santati*, 1925)

『カマル王女とサファイヤの迷宮』(1922: 第2章)の巻末には、シャンプラサード・ウパーデヤーエ (*Śambhūprasāda Upādhyāya*) による『プレームカーンター王女』の広告が掲載されている。

今日、小説界で人気が高まっている『プレームカーンター王女』のような小説を、ほかに聞いたことはないでしょう。『プレームカーンター王女』は老人や若者、子供、女性、ヨーガ行者みな的心をその甘さで満たしているのです。その一頁一頁が愛の喜びの魅惑的な言葉で彩られています。幻術、道徳、教戒、遁世、恋情、

思考、欲求、複雑な事柄、大変な苦勞、戦が描かれており、つまりそこに描かれていないものはないのです。……この小説は8章で完結しており、続編も数章に分けて出版されています。……尽きない好奇心をたったひとつの小説で満たしたいのであれば、この小説を読んでください。[Jauhara 1922] (筆者訳)

『プレームカーンター王女』第3～5、8章はヴィクラマ暦1979年(西暦1922年か1923年)に、また『続編プレームカーンター王女』の第1～3章は1925年に、第7章は1927年に出版されている [CHB; SAMP: III-1927, 12]。タイトルからも分かるように、ウパーデヤーエは『チャンドラカーンター王女』シリーズを大いに意識していたのだろう。閲覧可能な章には、王子と王女、幻術使いと迷宮、国家間の争いが描かれており、明らかにカトリー作品の人気に便乗した模倣作品だと考えられる。しかしながら、全8章構成であるうえ続編も出版されていることから、それなりに読者の支持を得ていたようである。

『カマル王女とサファイヤの迷宮』(1922: 第2章)の巻末にはさらに、「アエヤーリー小説」として『プレームカーンター王女』と併記するかたちで、(t)『月光』(*Śaśi-prabhā*)というタイトルも記載されている [Jauhara 1922]。また、『地下迷宮とマグヴァンスリー王女』(*Tilasmī Tahakhānā urpha Kumārī Maghuvam̐sarī*, 1931: 第3章初版)に掲載の広告で、『月光』は「迷宮と多数の幻術使い、欲深い者たちの熱狂が描かれた風変わりな小説」だとされている [Lāla]。

15. 『地下迷宮とマグヴァンスリー王女』(1931)

1931年に出版された『地下迷宮とマグヴァンスリー王女』は第2・3章であり、第1章は現存しているかも不明である。第3章の巻末広告から、全4章で構成されたこの小説には「社会、幻術使い、宗教、歴史、迷宮、探偵の描写とともに深い教え」と「9つのラサの満ちた詩」が描かれていることが分かる [Lāla]。さらに、この物語に登場する幻術使いを描いた小説 (u) 『軍団』(*Raṇa-maṇḍala*)の広告も掲載されている [Lāla]。

16. 『ローフタースの僧院』 (*Rohatāsamaṭha*, 1935)

ドゥルガープラサードは、『チャンドラカーンター王女』シリーズに登場するローフタース国とゴーパール王子を描いた物語、『ローフタースの僧院』も手がけていた。『ローフタースの僧院』第1章初版の出版情報は目録では確認できないが、『幽鬼ブートナート』のスピノフ小説と位置づけられることから、『幽鬼ブートナート』(第21章初版)の出版年である1935年以降に出版されたと思われる。また、第2章初版は1939年1月28日に出版されている [SAMP: II-1939, 7]。

1939年出版の小説に掲載された広告には、(v) 『迷宮の館』 (*Tilasmī Mahala*) というタイトルが記載されている。タイトルから察するにティラスミー・アエヤーリー小説だと思われるが、物語の詳細や出版年の記載はない [Sahavāī]。

このほか、出版社に月数ルピーで雇われて執筆する作家も存在し、利益を求めてティラスミー・アエヤーリー小説が量産された結果、小説の質は低下していった [Ānanda: 194-195]。『チャンドラカーンター王女』の模倣作品が出回っていることに関して、カトリー自身も読者に注意喚起していたほどである。

「『続編チャンドラカーンター王女』に登場する人物の物語だと思い、ある小説を購入したが、実際はそうではなかった」といった苦情が、わたしのもとに寄せられています。

そのため、読者の方々にお知らせしなくてはなりません。『チャンドラカーンター王女』や『続編チャンドラカーンター王女』に登場する人物の名前をつけてパナーラスで出版されている小説は、わたしが執筆したものではありませんし、『チャンドラカーンター王女』や『続編チャンドラカーンター王女』とは何の関係もありません。 [Khatri 1911] (筆者訳)

以上が、現時点で判明しているティラスミー・アエヤーリー小説の出版状況である。これは、あくまでも現時点で入手可能な目録や現物に基づいてまとめたものであるため、出版が確認できないティラス

ミー・アエヤーリー小説作品の存在は否定できない。さらに、カトリーが読者に注意喚起したような模倣作品にいたっては、そもそも目録に記載されたのかも疑わしい。カトリーによる注意喚起は1911年にはすでに確認できるため、それ以前にはカトリーが苦言を呈するほどの多数の模倣作品が、パナーラスの街中に出回っていたのであろう。たとえば、『ビーレンドル王子と銀の迷宮』や『小説ランバー』がそこに含まれていたかもしれない。ビーレンドル王子は『チャンドラカーンター王女』の主人公の名前であり、ランバーはチャンドラカーンター王女が森に住む娘に変装していた際に用いていた名前である。また表1からは、1900年から1915年頃にかけて、比較的多くの作品が出版されたことが分かる。1892年にカトリーによって産み出されたティラスミー・アエヤーリー小説は、ここにきて隆盛を迎えたともいえる。

3. 総称「ティラスミー・アエヤーリー小説」の成立

ティラスミー・アエヤーリー小説は、19世紀末から20世紀前半にかけて大きく発展した。しかし、一つの潮流としての名称が、これらの小説に初めから与えられていたわけではない。当時の雑誌記事において、「ティラスミー・アエヤーリー小説」という用語は見られないのである。総称としての「ティラスミー・アエヤーリー小説」は、この種の小説に関する論評を掲載した当時の雑誌記事や、のちに批評家らがカトリーを評価するなかで、徐々に確立されていった。以下では、「ティラスミー・アエヤーリー小説」という用語が登場する過程を考察する。

1908年に出版されたとある小説の序文には、次のような意見が載せられている。この記述は現時点で得られるティラスミー・アエヤーリー小説の評価のなかでも最も古いものであり、功利主義的文学観が根付いた当時のヒンディー文学界における有識者らの意見を代表していると考えてよい。

ベンガルやマラーティー、グジャラーティーなどの言語で執筆さ

れている小説も、国をより良くしようという目的をもって執筆されているが、ヒンディー小説はただの娯楽と化し、享乐的で不道徳なもの、巢窟となっている。迷宮や魔法についての摩訶不思議な話はとても楽しいものではあるが、事実、そこには歴史もなければ地理学も天文学もなく、社会改革どころか社会改悪となり得るのである。[Tivārī 1908: 1-2] (筆者訳)

ここで使われている「迷宮や魔法についての摩訶不思議な話」という文言は、明らかにティラスミー・アエヤーリー小説を示しているが、これは名称というよりも、むしろ物語内容の解説という意味合いが強い。

カトリーとその小説について現時点で得られる最古の記述は、月刊誌『サラスヴァティー』(Sarasvatī, 1909: 8月号)に掲載された記事であろうか。しかしここでは、カトリーを「『チャンドラカーンター王女』と『続編』を執筆した人物」と言及するに留まり、この種の小説全体についての記述は見られない [Śarmā 1909: 370]。同誌10月号(1909)で初めて、『チャンドラカーンター王女』以降の一連の小説をまとめて表現する言葉、すなわち「幻術使いの本」(aiyārī kī pustakem) および、「数々の続編」(santatiyom) が登場した。これは、主に「幻術使い」(aiyāra) が活躍する物語であること、また、カトリーが執筆した『チャンドラカーンター王女』のシリーズ物として「続編」(santati) という単語が用いられたことから、類似した作品についてもその言葉を用いて称したものである。以下の引用文は、一連の小説を「数々の続編」と表現した一例である。

質の悪い言語で書かれた本は、読者の品行をおとしめ、心の中に悪の種を植え付ける。言語を悪用する者は、人間社会の大きな敵である。人間社会の幸せを願う者は、言語の擁護に常に熱心であり、その言語を命より愛しいものとみなし、その発展の手段を考えるのである。

聡明な人々は、このことより、作家の責任がどれだけ重いのか

理解できるであろう。散見される無益な「数々の続編」を執筆することが作家であるということではない。作家はまず、人間社会にとって有益となるものをその理想とすることに注意を払わねばならない。[Satyadeva: 462] (筆者訳)

月刊誌『サラスヴァティー』(1917: 9月号)に掲載された記事には次の記述が見られる。

最近のヒンディー小説には、摩訶不思議な事件が中心に描かれている。その奇妙な物語で読者を楽しませようとしているのだ。……摩訶不思議な事件に満ちた小説に描かれるのは、主に探偵や迷宮で、登場人物は若い恋人や探偵である。このような小説が若者の手に渡ると、若者は勉学を忘れて小説に熱中する。夜中に迷宮をさまよひ、幻術使いと共に戦うのだ。しかしそこからは何の利益も得られない。それどころか、若者の心のなかに有害な考えが間違ひなく入り込んでいくのである。[Jošī: 129] (筆者訳)

ここでは、探偵と迷宮が描かれる小説を「摩訶不思議な事件に満ちた小説」(ghaṭanā-vaicitrya se pūrṇa upanyāsa)と称している。この表現は、後世の文学史に見られる分類のひとつ「事件小説」(ghaṭanātmaka upanyāsa)に類似している。19世紀末から20世紀初頭のヒンディー小説の分類法は様々であり、そのなかでも社会小説・歴史小説・事件小説という三つが小説の内容に基づく基本的な分類であろう⁽⁸⁾[Prakāśa: 75-76, 261-311]。事件小説とは次々と事件が起きる物語を意味しており、その下位区分にティラスミー・アエヤーリー小説と探偵小説が位置づけられている。

ヒンディー文学界の著名な評論家であるラーマチャンドラ・シュクル(Rāmacandra Śukla, 1884-1940)は、1929年に『ヒンディー文学の歴史』(*Hindī Sāhitya kā Itihāsa*)を出版した。シュクルの評論は多くの批評家より高い支持を得ており、カトリーの批評においても、その評価はひとつの基準となっていた。しかしながら、カトリーに関する記述のなかに『チャンドラカーンター王女』を含む分野の名称そのものは見られ

ない。かわりに、それに準ずるものとして、「幻術使いの小説」(aiyārī ke upanyāsa)あるいは「『迷宮』と『幻術使い』の小説」(‘tilasma’ aura ‘aiyāra’ ke upanyāsa)といった、「ティラスミー・アエヤーリー小説」という名称に非常に近い記述が見られる [Śukla: 334]。さらに月刊誌『月』(Cānda, 1933: 12月号)に掲載された広告には、「幻術使いと迷宮の小説」(ayyārī aura tilasmī upanyāsa)と記載されている。これも「ティラスミー・アエヤーリー小説」という名称に限りなく近いものである。

1935年、ミッシュルバンドゥ⁹⁾(Miśrabandhu)は『ミッシュルバンドゥの戯れ』(Miśrabandhu-vinoda)でカトリーを取り上げたが、そこにひとつの分野としての名称は見られない [Miśra: 314-315]。一方、1941年にラクシュミーサーガル・ヴァールシュネーエ (Lakshmisāgara Vārshṇeya)は、一連の小説を「ティラスミー小説」(tilasmī upanyāsa)と称している [Vārshṇeya: 188]。1952年にはハザーリープラサード・ドゥヴィヴェーデーが、「ティラスミー小説」のほかにも「幻術使いと迷宮の小説」(aiyyārī aura tilasmī upanyāsa)、「迷宮に関する小説」(tilasmāī upanyāsa)と記した [Dvivedī: 239-240]。

1955年、ラーマチャンドラ・ティワーリー (Rāmacandra Tivārī)は、一連の小説を「ティラスミー・アエヤーリー小説」(tilasmī- aiyārī upanyāsa)と表記した [Tivārī 1955: 157]。ティワーリーは、主人公が迷宮を壊して財宝を手に入れる物語が描かれた小説を「ティラスミー小説」とし、さらに、「ティラスミー小説」には「幻術使い」(aiyāra)の描写が不可欠であることから、二つを併記して「ティラスミー・アエヤーリー小説」と称するようになったと述べている [Tivārī 1955: 156]。しかし、「迷宮」(tilasma)に重点を置かない「幻術使いの本」(aiyārī kī pustakam)という表現が、比較的初期の1909年にすでに見られることに加え、当時の広告でもこの類いの小説は「アエヤーリー」という区分で紹介される傾向にあるため、「ティラスミー・アエヤーリー小説」という総称に先行して「ティラスミー小説」という用語が存在していたと断言することはできない。様々な批評を読むかぎり、一連の小説について言

及する際に「迷宮」と「幻術使い」のいずれかを前面に出した名称を用いるか、あるいは両者を併記した名称を用いるかに関しては、言及する者それぞれの解釈に委ねられているように思われる。

1962年にはカエラーシュ・プラカーシュ (Kailāsa Prakāśa) が「ティラスミー小説」と記している [Prakāśa: 75-76]。以降、ヒンディー文学の批評家らのあいだで「ティラスミー小説」あるいは「ティラスミー・アエヤーリー小説」という名称が定着していった⁽¹⁰⁾。

また、近年では、「ティラスミー・アエヤーリー小説」の略称として「ティラスミー小説」と述べる傾向にある。たとえば、L. R. シャルマー (L. R. Śarmā) は、「デーヴキーナンダン・カトリーのティラスミー・アエヤーリー小説」(Devakīnandana Khatrī ke Tilismī tathā Aiyārī Upanyāsa) と題した章において、「ティラスミー・アエヤーリー小説」と同等の意味で「ティラスミー小説」という名称を用いている⁽¹¹⁾[Śarmā: 26]。

このように、カトリー作品とそれに追隨する作品群は、当初は「迷宮や幻術使いについて描かれたもの」という漠然とした集まりにすぎなかった。しかし、時の経過とともに読者を増やし、版を重ねることで、ヒンディー小説のひとつの時代を築いていった結果、後世の批評では、それらの作品群が功利主義的文学観に反しているにも拘らず、評価されるべきものと認識されるようになっていった。そして、その評価を下すなかで総称の必要性が高まり、徐々に「ティラスミー・アエヤーリー小説」という名称に統一されていったと考えられる。

4. おわりに

19世紀末から20世紀初頭にかけてのカトリーの成功を目の当たりにした他の作家らは、王子や王女、幻術使い、覆面の騎士、迷宮とその監視役、さらに眠り薬、気付け薬を題材にした小説を執筆しはじめた。しかし、カトリーに倣って上述のモチーフを物語のなかに描きだそうとすると、大なり小なり似通った物語になってしまうのであろう。ジョーハルは、「とある小説の模倣だ」という批判があることに対して

反論を述べているが、ティラスミー・アエヤーリー小説を執筆する場合、たとえ作家側に模倣したという意識はなくとも、『チャンドラカーンター王女』の二番煎じに過ぎないと捉えられても仕方のないことである [Jauhara 1908]。一方、ジョーハルのように、あたかも魔法のような出来事をそのまま描写する作家もいれば、ゴースワミーのように現実的な描写にこだわる作家もいた。不可思議な描写に現実的な解説を加えるカトリーは、言うならば彼らの中間に位置する。この絶妙なさじ加減が、カトリー小説の人気の秘密なのかもしれない。

ティラスミー・アエヤーリー小説の出版は、20世紀初頭に全盛期を迎えた。そして20世紀半ばになると、確認できるティラスミー・アエヤーリー小説は減少していく。ここでひとつのブームが終焉を迎えたのだろうか。プレームチャンドによる『休護所』が好評を博したことで、ヒンディー作家らの関心が写実主義小説へと向かったことも一因であった。当時の批評家らの酷評が、ティラスミー・アエヤーリー小説を執筆する意欲を作家から奪ってしまった可能性も考えられる。また、『プレームカーンター王女』や『クリシュナカーンター王女』といったシリーズ物も出版されてはいたものの、『チャンドラカーンター王女』シリーズと同程度、あるいは、それ以上に版を重ねたという記録は見つからない。『チャンドラカーンター王女』に追随する作家らが「迷宮」と「幻術使い」という二つのモチーフを自身の作品に取り入れることにのみ重点を置き、カトリー作品に見られるような新鮮さの追求が不十分であったことが原因であろうか。『チャンドラカーンター王女』を超える作品の不在が、ティラスミー・アエヤーリー小説を短命に終わらせた大きな要因であったと考えられる。

註

- (1) 本稿におけるデーヴァナーガリー文字の翻字方式はALA-LC Romanization tablesに準拠している。ただし、SAMPの記録、なかでも著者名や出版社名は英語で記されているため、そこから得た情報はSAMPに従って表記した。ま

た、ヒンディー語のカタカナ表記については、原語の文字表記の転写ではなく、より実際の発音に近い表記を採用した。

- (2) 本稿でこれから言及する『チャンドラカーンター王女』(1892)との関係について補足する。

従来、『チャンドラカーンター王女』第1章初版の出版年に関しては様々な説が唱えられてきた。大部分が以下の三つの説に分類できる。1. 1888年説。この説はインドのヒンディー文学者らに広く支持されている。それまで執筆経験がなかったカトリーは、1887年に馬車での旅を終えて帰宅するや石で作られた猫の置物を撫でながらペンを取り、青色の紙に「チャンドラカーンター」と書きつけたという話が知られており、これより1887年に執筆をはじめ1888年に出版したとされる [Śarmā 1993: 5]。2. 1891年説。『ヒンディー小説の歴史』の著者ラーエに支持され、ガーフキー (Peter Gaeffke) もその意見を採用している [Rāya 1965: 270; Gaeffke: 25]。これは、後に出版された版に掲載されている『チャンドラカーンター王女』初版の序文に、「1891年アーシャーダ月」と記されていることに基づいた説であろう。3. 1892年説。ヒンディー文学者オルシニ (Francesca Orsini) やスターク (Ulrike Stark) がこの説を採用している [Orsini: 123; Stark: 72]。このように、様々な説が存在したのは、『チャンドラカーンター王女』第1章初版が入手困難であるうえ、インドの文学者らが一次資料をもとにせず、さらには参考文献や引用元を明確に表記しないことも原因であろう。なお、ここではタイトルを「チャンドラカーンター姫」と訳しているが、本稿ではチャンドラカーンターが王の娘であることを明確に表現するために「チャンドラカーンター王女」としている。

- (3) ヒンディー小説の発展におけるベンガル語やウルドゥー語、マラーティー語、英語などの他言語文学の影響は、本稿次章で紹介するIOLやBM, BL, SAMPの目録を参考に当時の出版状況を把握することで見えてくるはずである。しかしながら、これらの目録も完全なものとは到底言いきれない。ヒンディー語の出版目録を見るかぎりでは、むしろ記載されていない作品や版が多数を占めるため、あくまでも入手できる情報をもとに当時の出版状況を推

測するほかない。さらに、目録には最低限の情報しか記載されておらず、各作品の出版情報から内容までを正確に把握するには、目録に記載された作品を一つひとつ手に取って確認する必要がある。ヒンディー小説の発展における他言語文学の影響についての考察は今後の課題としたい。

- (4) プレームチャンドがヒンディー文学における写実主義小説の生みの親とされる一方で、リアリズム作家と呼ぶにはふさわしくないとする意見もある。たとえば [高橋] は、人物描写や風景描写の乏しさを見ると、むしろインドのそれまでの物語文学の世界から一歩も外へ出るものではなかったとしている。
- (5) プリチェット (Frances W. Pritchett) は SAMP による出版記録は貴重な資料であると述べるながらも、そこに記載された情報量は実際の出版活動量に比べるとかなり少なく、不完全なものであるとした [Pritchett: Appendix A]。
- (6) 紀元前57年を元年とする、ウッジャインのヴィクラマ・アーディティヤ王が創始したと伝えられる紀元。矢野によると、インドの年の数え方には満と数えがあり、年の始まりも暦によって異なる。ヴィクラマ暦を満で数えた場合、西暦に換算するにはヴィクラマ暦の年数から57か56を引く必要があるが、この区別はヴィクラマ暦の日付によって決定する [矢野: 166-168]。
- (7) インド古典期の詩論や演劇論で、作品鑑賞者の感情が刺激されることにより純粹に高められた味わいや美的な喜び。恋、滑稽、悲しみ、怒り、勇猛、恐怖、嫌悪、驚異の八種のラサがある。後世のヒンディー詩論では、寂靜を入れてナヴァラサ (九種のラサ) とする。
- (8) 執筆目的という観点からは、「娯楽小説」(manorañjaka upanyāsa) と「道徳小説」(upadeśatmaka upanyāsa) の二つに分類される。ヴァールシュネーエはティラスミー・アエヤーリー小説以外の作品の執筆目的を、社会・宗教・個人の改善、つまり道徳と教訓であるとし、アーナンドはティラスミー・アエヤーリー小説や探偵小説など、迷宮・幻術使い・強盗・犯罪・超俗の要素を含む物語を総合して「好奇心中心の小説」(kutūhalapradhāna upanyāsa) とした [Vārshņeya: 188, 194; Ānanda: 49]。
- (9) ガネーシュビハーリー・ミッシュル (Gaṇeśabihārī Mīśra), シヤームビハー

リー・ミッシュル (Śyāmahāhārī Mīśra, 1873–1947), シュクデーヴビハーリー・ミッシュル (Śukadevabhāhārī Mīśra, 1878–1951) の三名の兄弟からなる。

- (10) [Tivārī 1969: 262; 1980: 483], [Maj̄ṭhiyā], [Nagendra: 483], [Siṃha: 94] など。
- (11) ここで注意すべき点は、近年、「ティラスミー・アエヤーリー小説」の略称として「ティラスミー小説」という名称が見られる一方で、「アエヤーリー小説」という用語が見られないことであろう。初期の雑誌に掲載された批評や広告、さらにシュクルの著書には「幻術使いの小説」(aiyārī ke upanyāsa) などと記されているものの、それ以降は、両者を併記するか、あるいは「迷宮」を強調した表記に限られている。

参考文献

- Ānanda, Vimreśa, 1990, *Hindī ke Kutūhalapradhāna Upanyāsa*, Naī Dillī: Anurāga Prakāśana.
- Dvivedī, Hajārīprasāda, 1985, *Hindī Sāhitya: Udbhava aurā Vikāsa*, Nayī Dillī: Rājakamala Prakāśana.
- Gaeffke, Peter, 1978, *Hindī Literature in the Twentieth Century (A History of Indian Literature, vol. VIII, fasc. 5)*, Wiesbaden: Harrassowitz.
- Gosvāmī, Kiśorīlāla, 1914, *Kaṭe Mūḍa kī Do Do Bāteṃ yā Tilasmī Śisamahala*, Vṛndāvana: Śrīsudarśanapresa.
- Gupta, Gaṅgāprasāda, 1912, *Vīrapatnī vā Rānī Saṃyogitā (Aitihāsika Upanyāsa)*, Banārasa: Hitacintaka Presa.
- Jauhara, Harikr̄ṣṇa, 1908, *Mayaṅka Mohinī vā Māyāmahala*, Kāśī: Laharī Presa.
- Jauhara, Harikr̄ṣṇa, 1916, *Kamalakumārī vā Tilasma Nīlama*, Benares City: Lahari Press.
- Jauhara, Harikr̄ṣṇa, 1922, *Kamalakumārī vā Tilasma Nīlama*, Benares City: Lahari Press.
- Jośī, Śyāmasundara, 1917, “Hindī ke Nāṭaka aurā Upanyāsa,” *Sarasvatī*, September 1917, Prayāga: Inḍiyana Presa, pp. 127–130.

- Khatri, Devakīnandana, 1902, *Candrakāntā, Upanyāsa, Chauthā Hissā*, Banārasa:
Laharī Presa.
- Khatri, Devakīnandana, 1904, *Candrakāntā, Upanyāsa (Sacitra), Pahilā Hissā*,
Banārasa: Laharī Presa.
- Khatri, Devakīnandana, 1905, *Candrakāntā Santati: Caubīsavām Hissā*, Banārasa:
Laharī Presa.
- Khatri, Devakīnandana, 1906, *Candrakāntā Santati: Dūsarā Hissā*, Banārasa: Laharī
Presa.
- Khatri, Devakīnandana, 1911, *Candrakanta Santati 24*, Benares City: Lahari Press.
- Khatri, Devakīnandana, 1912, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī,*
Pāñcavām Hissā, Benares City: Lahari Press.
- Khatri, Devakīnandana, 1913, *Bhūtanātha: Upanyāsa, athavā, Bhūtanātha kī Jīvanī,*
Chathavām Hissā, Benares City: Lahari Press.
- Khatri, Durgāprasāda, 1926, *Vidhātā kī Līlā*, Kāśī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1931, *Bhūtanātha Upanyāsa athvā Bhūtanātha kī Jīvanī,*
Satrahavām Hissā, Banārasa Siṭī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1932, *Bhūtanātha Upanyāsa athvā Bhūtanātha kī Jīvanī,*
Aṭṭhārahasavām Hissā, Banārasa Siṭī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1933, *Bhūtanātha Upanyāsa athvā Bhūtanātha kī Jīvanī,*
Unnīsavām Hissā, Banārasa Siṭī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1934, *Bhūtanātha Upanyāsa athvā Bhūtanātha kī Jīvanī,*
Bīsavām Hissā, Banārasa Siṭī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1935, *Bhūtanātha Upanyāsa athvā Bhūtanātha kī Jīvanī,*
Ikkīsavām Hissā, Banārasa Siṭī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1966a, *Rohatāsamaṭha athavā Tilismī Bhūta, Pahilā Khaṇḍa*
(Bhāga 1 se 3 taka), Banārasa Siṭī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1966b, *Rohatāsamaṭha athavā Tilismī Bhūta, Pahilā Khaṇḍa*
(Bhāga 4 se 6 taka), Vārāṇasī: Laharī Buka Dīpo.
- Khatri, Durgāprasāda, 1987a, *Rohatāsamaṭha*, Vārāṇasī: Laharī Buka Dīpo.

- Khatri, Durgāprasāda, 1987b, *Rohatāsamaṭha*, Vārāṇasī: Laharī Buka Ḍipo.
- Lāla, Rāmaśaṅkara, 1931, *Tilasmī Tahakhānā urpha Kumārī Maghuvamśarī, Tīsarā Khaṇḍa*, Banārasa Siṭī: Mevālāla Eṅḍaako.
- Madhureśa, 1989, *Devakīnandana Khatri*, Nayī Dillī: Sāhitya Akādemī.
- Majṭhiyā, Kṛṣṇa, 1978, *Hindī ke Tilasmī vā Jāsūsī Upanyāsa*, Jayapura: Pañcaśīla Prakāśana.
- Mīśra, Gaṇeśavihārī, Mīśra, Śyāmabihārī, Mīśra, Śukadevabihārī, 1972, *Mīśrabandhu Vinoda: Khaṇḍa 3-4*, Lakhanaū: Adhyaksha Gangā Pustakamālā Kāryālaya.
- Nagendra, 1980, *Hindī Sāhitya kā Itihāsa*, Nayī Dillī: Neśanala Pabliśinga Hāusa.
- Orsini, Francesca, 2004, “Pandits, Printers and Others: Publishing in nineteenth-century Benares” *Print Areas: Book History in India*, New Delhi: Permanent Black, pp. 103–138.
- Prakāśa, Kailāsa, [1962], *Premacanda-Pūrva Hindī-Upanyāsa*, Dillī: Hindī Sāhitya Samsāra.
- Pritchett, Frances W., 1991, *The Romance Tradition in Urdu: Adventures from the Dastan of Amir Hamzah*, New York: Columbia University Press.
- Rāya, Gopāla, 1965, *Hindī Kathā Sāhitya aura Usake Vikāsa para Pāṭhakoṃ kā Prabhāva*, Paṭṇā: Grantha Niketana.
- Rāya, Gopāla, 2010, *Hindī Upanyāsa kā Itihāsa*, Naī Dillī: Rājakamala Prakāśana.
- Sahavāī, Nadīma, 1939, *Khūnī Jauharī yānī Hukama kī Malaka*, Hindī Pustaka Bhaṇḍāra.
- Śarmā, L. R., 1993, *Upanyāsakāra Devakīnandana Khatri*, Naī Dillī: Neśanala Pabliśinga Hāusa.
- Śarmā, Vidyānātha, 1909, “Hindī kī Ucca Śikshā” *Sarasvatī, August 1909*, pp. 369–372.
- Śarmā, Īśvarīprasāda, 1912, *Navāba Nandinī vā Āyeśā (Durgēsanandinī Upanyāsa kā Upasamhāra)*, Dūsarā Bhāga, Kāśī: Candraprabhā Presa.
- Satyadeva, 1909, “Hindī-Sāhitya aura Hamārā Kāma” *Sarasvatī, October 1909*, Prayāga: Inḍiyana Presa, pp. 460–464.

- Siṃha, Baccana, 1986, *Ādhunika Hindī Sāhitya kā Itihāsa*, Ilāhābāda: Lokabhārati Prakāśana.
- Stark, Ulrike, 2007, *An Empire of Books: The Naval Kishore Press and Diffusion of the Printed Word in Colonial India*, New Delhi: Permanent Black.
- Śukla, Rāmacandra, 1972, *Hindī Sāhitya kā Itihāsa*, Kāśī: Nāgarī Pracārīṇī Sabhā.
- Śrīvāstava, Śaṅkaradayāla, 1908, *Mahendrakumāra vā Madanarañjanī Upanyāsa, Prathama Bhāga*, Benares: Rāmalāla Varmmā.
- Tivārī, Cuniḷāla, 1908, *Premīmahātmā vā (Bhivānīke Guptabheda.)*, Kalakattā: Rāmapresa.
- Tivārī, Rāmacandra, 1955, *Hindī kā Gadya-Sāhitya*, Vārāṇasī: Viśvavidyālaya Prakāśana.
- Tivārī, Rāmacandra, 1969, “Upanyāsa: Premachanda Pūrva” *Hindī Sāhitya, San 1850 ī. ke Bāda*, Prayāga: Bhārātīta Hindī Parishad.
- Tivārī, Rāmacandra, 1980, “Bhāratendhu yuga: Gadya Sāhitya” *Hindī Sāhitya kā Itihāsa*, Nayī Dillī: Neśanala Pabliśinga Hāusa.
- Varmmā, Nihāracanda, 1915 or 1916, *Motīmahala yā Lakshmīdevī, Prathama Bhāga*, Kalakattā: Lalita Presa.
- Varmmā, Nihāracanda, 1917, *Motīmahala yā Lakshmīdevī, Tīsarā Bhāga*, Kalakattā: Durgā Presa.
- Varmmā, Rāmalāla, 1911 or 1912, *Putalīmahala va Gulābakumvarī, Pahilā Bhāga*, Banārasa Siṭī: Hitacintaka Presa.
- Vārshṇeya, Lakshmisāgara, 1954, *Ādhunika Hindī Sāhitya: 1850–1900 ī.*, Ilāhābāda: Ilāhābāda Yunivarsiṭī.
- Yugeśvara, 1994, *Devakīnandana Khatrī Samagra: Candrakāntā, Candrakāntā Santati (24 Bhāga) sāhita Khatrījī ke Anya Sabhī Pāñcom Upanyāsa Eka Jilda meṃ*, Vārāṇasī: Hindī Pracāraka Sansthāna.
- 高橋明, 1993, 「ブレイムチャンドとリアリズム」, 『印度学仏教学研究』, 第41卷2号, 日本印度学仏教学会, 1089–1084頁。
- ドゥヴェイヴェーデー, ハザーリープラサード, 坂田貞二・宮本啓一・橋本泰

元訳, 1992, 『インド・大地の讃歌——中世民衆文化とヒンディー文学』,
春秋社。

安永有希, 2019, 『『チャンドラカーンター』: 迷宮と幻術使いの不思議な世界』,
『言語・地域文化研究』, 第25号, 東京外国語大学, 259-279頁。

矢野道雄, 1992, 『占星術師たちのインド——暦と占いの文化』, 中央公論社。

目録

Blumhardt, J. F., 1893, *Catalogues of the Hindi, Panjabi, Sindhi, and Pushtu Printed Books in the Library of the British Museum*, London.

Blumhardt, J. F., 1902, *Catalogue of the Library of the India Office, Vol. II, Part III, Hindi, Panjabi, Pushtu, and Shindhi Books*, London: Eyre and Spottiswoode.

Blumhardt, J. F., 1913, *A Supplementary Catalogue of Hindi Books in the Library of the British Museum, Aquired during the year 1893-1912*, London.

Blumhardt, J. F., Wilkinson, J. V. S., 1957, *A Second Supplementary Catalogue of Printed Books in Hindi, Bihari (Including Nepali or Khaskura, Jaunsari, Mandauli, & c.) in the Library of the British Museum*, London: The Trustees of British Museum.

Catalogue of Hindi Books, (CHB) 1903-44, London: The British Library.

Catalogue of Hindi Books, (CHB) 1945-55, London: The British Library.

Catalogue of Hindi Books, (CHB) 1956-75, London: The British Library.

South Asia Microform Project (SAMP), *Statement of Particulars Regarding Books and Periodicals Published in the United Provinces*.

(東京外国語大学 非常勤講師・大学院総合国際学研究院特別研究員)

employees during the final days but failed to do same for the other nationals. The present article will illustrate how Kishimoto, as the Japanese head of the British dominated Chinese institution, displayed his political flair in balancing the power of employees from the three countries and how he combined his own national identity and his sympathy to China.

A Short History of the “Tilasmī Aiyārī” Novel: The Rise and Decline of
a New Trend in Hindi Literature in the Years around 1900

YASUNAGA Yuki

Towards the end of the 19th century, Hindi writer Devakīnandana Khatrī (1861–1913) incorporated the two motifs of the labyrinth (*tilasma*) and the master of deception capable of solving it (*aiyāra*) into his first novel entitled *Candrakāntā* (first published in 1892), an epic fantasy which opened up a whole new genre of popular Hindi fiction, called “Tilasmī Aiyārī upanyāsa,” which has been widely read ever since. Despite the plethora of similar works following Khatrī’s style, none were able to eclipse *Candrakāntā* and its 24-part sequel, *Candrakāntā Santati*. After a surge of Tilasmī Aiyārī novels during Khatrī’s lifetime, the number of new works began to decline during the early 20th century as realism came to dominate Hindi fiction.

The research to date on the Tilasmī Aiyārī novel has been limited to commentaries on Khatrī’s masterpieces and introductions to other authors adopting his style, while no authoritative bibliography has yet been compiled covering the whole genre. In response, this article is an attempt to clarify the history of the Tilasmī Aiyārī novel, as one breakthrough in the early stages of the development of the Hindi novel, based on the library catalogs created in the midst of British colonial censorship, which, while by no means complete, still make it possible to get some idea of circumstances surrounding Hindi publishing at that time. In addition to the available catalogs, advertisements

appearing in the actual publications provide important clues to the publishing history of the Tilasmī Aiyārī genre.

The author also traces the origin of the term “Tilasmī Aiyārī upanyāsa,” and its “discovery” by later literary critics, since there was no such characterization of Khatrī’s style, or its imitators, during its heyday.